怪談『とのゐ草』論

田川邦子

談林俳諧の手法を、散文の世界に拡散させてダイナミックな表現をわがものに、新しい文学、浮世草子への道を開いた西鶴に比較すれば、あくまで忠実な貞門の徒であった安静の散文などに、なにを今さらの感は免れないかもしれない。しかし好きであるというのは、どうしようもない事実で、もう何年も前から、何度この短篇集を繙いたことか。ゼミナールのテキストにして、学生といっしょに勉強したこともある。そしてその都度感じるのは、この作品の良さは、うまく説明できるようなものでなく、面白いと感じる人にのみ面白く、説明に多言を費すれば何やら空しく、といったところにあるのではないかということだった。であるからこれについてものを書くのは、本当は億劫なことなのだけれど、所詮文学というのは、多かれ少なかれこのようなところのあるもの、研究という営みを通さなければならない古典でも事情は同じで、好きだからこそ西鶴を研究し、平家物語に打ちこみ、川柳雑俳の類に心が惹かれるのは当然で、研究とは、他人には不可解ではあっても、そうしたものの上に築かれた営為であることは間違いないと思う。

『とのゐ草』は、貞門の俳人荻野安静が収集し、その弟子似船が刊行した怪談集であるといわれる。

潁原退蔵氏が『近世怪異小説の一源流』という論文で、『曽呂利物語』と並べてこの作品に触れ、『奇異雑談集』系流の中国小説翻案の怪談もよいが、お伽衆の中から出た、我国本来の怪異物語の源流に、もう少し注目する必要があるのではないか、というような事を書いておられたのを、かなり以前古い雑誌（『国語・国文』）をひっくり返している折に、読んだことがある。その論文はたしか昭和十三年頃書かれたものだったが、『とのゐ草』という作品名を私が記憶のうちに止めたのは、その折であった。

さいわい古典文庫に、野間光辰氏校訂の一冊がはいっており、これにはたいへん有難い思いをした。というのはこの『とのゐ草』、別名『御伽物語』は、江戸時代愛好者が多かったとみえて、いくたの改題本があり、『御伽物語』を銘うつのもこの改題本の一種で、原板『とのゐ草』は、一、二、三巻のみの零本として残るだけ。入木改題した『お伽物語』には、原板『とのゐ草』にはあったと思われる、序文を削除してあるのが何よりの欠点であるが、古典文庫『御伽物語』は、さいわい零本『とのゐ草』に残った序文から、これを補い、だいたいもとに近い形で、読むことができるようになっているからである。

『とのゐ草』には、『御伽物語』以外にも、いくたの改題本があり、『日待草』、大江文坡による『怪談笈日記』『怪談とのゐ袋』、（ともに明和五年）、明和六年の『近代百物語』五冊など、誰もが知る通りだが、これはこの作品に、愛好者が絶えなかったことを意味している。なかには単なる改題ではなく、削除したり、別の話をつけ加えたりした例もあるということは、後代の愛好者に、この作品は、加工再編の素材としての魅力を感じさせるものがあったからであろう。

改題本を並列的に通観してみるのも面白いが、それは他の機会に譲り、今は、この作品のどこに魅力があるのか、それを説明できれば、この稿の目的は達せられるということを念頭に、筆をすすめてみたいと思う。

原本『とのゐ草』の序文には、

筆とればもののかかるるにや、先生この話をあつむ。

また、

この反故よ、萬治るみつの陽より、むなしく蟫の家となれり。于戲ゆく師のかたみならずや。われすてがたにおもひければ、ふるきねもなき萍のはかなきあつめぬるぞ。

などの個所があるが、この序文を高尾似船の筆になるものとし、文中「先生」といわれている人を、似船の師荻野安静だとする説[1]に、今は素直に従っておきたいと思う。

荻野安静については、『滑稽太平記』巻之五「荻野安静の事」に、

安静は、雑職荻野与左衛門が子、長左衛門の事也。手習の師なり。誹諧修行す。貞室三物の相手を離れ、剃髪し、俳を渡世に立たり。万治二年より、似空とあらため、三物には、重隆・俊秀など組て流布せり。

春も立つて一さし舞ふや朝日影　似空
うづまく波もくまん若水　重隆
追くだす川瀬の（小）鮎海に出て　俊秀

（中略）

似空は物和はらかに直なる人なり。少は事をも知りたりとぞ。

貞徳没後、その門弟間に確執が起きたとき、安静とても、無関係でいるわけにはゆかなかった事情が、貞室との離反という事実にあらわれているが、同じ貞室と袂をわかった季吟が、「口才を先立てたる風俗」で、「我を立」て、「和歌の道に似合わ」ないやりかただと、世評を受けたのに対し、安静はやはり、「物和はらかに直なる人」なのであった。

およそその人柄から推して作品を論ずるほど、間違いのもとになる事はないのだが、「物和はらかに直なる人」という評は、『滑稽太平記』を引くまでもなく、『とのゐ草』を読めば、すぐにでも感じとることができる、作者の人柄、肌ざわりで、それはただの作者の人間的な特質を超えたところで、文章の中に、素直な感性となって生かされ、しかも、人を見る眼の穏やかなまなざし、理解の深さ、事の道理を察知する見識など、「少は事をも知りたりとぞ」という評が、これまたよく言い当てているのに、驚くのである。

弟子の似船が、師安静の遺稿を、どのようなものとして見ていたかを表わすものとして、同じ序文に、

おきなぐさのおもおもと、うば竹のよしある袖にはいはず、ただ若むらさきの、よそふく風のこきなびきやすく、色てふふかくときめく俗に、傍にいさめのとのゐぐさならし。

とあり、色に迷う若い男女への、いさめの書であることを、強調している感がある。「いさめ」、つまり放訓性という特徴は、この時期の文芸から、切り離しては考えられず、『とのゐ草』とて、例外ではないのだが、「いさめのとのゐぐさ」というほどには、色に迷う男女の物語が多いというわけではない。六十八話中、十話程度である。ただこの種の話に傑作が多いこと、また安静の文章の技巧が、話の中に生かされるのは、この種の色に迷う男女の物語であり、他の怪談作品集に比して、『とのゐ草』が、文学的に優れていると見られるのも、この種の素材の中にあることは事実なのである。

『奇異雑談集』の「古堂の天井に女を磔にかけをく事」（巻一―四）は、『とのゐ草』の「三人しなじな勇ある事」（巻四―第五）[2]に、素材を提供している作品らしいと推定されたのは、山口剛氏であるが[3]、これは夫を裏切った妻が、夫の私刑で、生きたまま古堂の天井裏に磔にされたのを、旅僧が助ける話である。すでに『奇異雑談集』の筆者も怪談でないのに気がさしてか、「奇異の儀にあらずといへども女人の執心悪業をかたる」と、断わり書きを附している。「執心悪業」というのは、旅僧に命を助けられ、実家に送りとどけられた女が、再び古堂に行き、夫が斬り捨てた愛人の首を持ち帰り、それを旅僧に託したからである。亡き愛人の供養を、この親切な旅僧に期待したのでもあろうか。怪談ではなくても、よほど特異な話として、記録されたもの

だろう。常識では理解のとどきかねる女の行為が、「執心悪業」と難ぜられたのは、当時の道徳からみて、仕方のないことであった。

「三人しなじな勇ある事」では、旅僧の代りに、三人の恐いもの知らずの男が登場する。山中の古宮に化物が居るとの評判で、正体をつきとめるため、夜陰三人で出かけ、不義をした女の命を助け、親の家へ送りとどける。途中から一人の男は、女の頼みを聞き入れ、愛人のなま首を取りに、宮へひき返す。天井から血の雫が落ちても、仲間から問われるまでは、黙っている男、不気味な女の声を恐れもせず、天井裏への梯子を登る男。「三人しなじな勇ある男」たちであるが、これはいかにもうまくできていて、作り話であることも歴然としている。

功はとりどりなれど、その勇健おなじ天晴破家もの、こぐち(戦場)にもむけ、さきにもたのままし。

というのが、筆者の評で、この「勇気ある」男たちを揶揄する口調である。

『奇異雑談集』の「古堂の天井に女を磔にかけをく事」では、僧に助けられた女は、「人のむじつを申かけて外夫をしたりとて、男を生害させてくびをとりて――」と、不義の事実をひた隠しに、無実であることを強調するのだが、この方が話としてはよほど現実味がある。しかし「三人しなじな勇ある事」では、助けてくれた三人の男を前に、女は人の妻でありながら、別に愛人を持った事実を隠さない。

げに其人のなさけもすてがたく、風に尾花のいとみだれつつ、むすぶちぎりもあさぢふの、をののしのはら忍れど、あまりて人のめにもれて、あた名もよそにたつたごえ、ふた道かくるありさまの、つつむとすれど紅葉ばの、こきはわが身のおもひかは。色てふまさる恋ごろも、あかづかぬまにあらはれて――

と、この条は、雅文の技巧に塗りこめられつつ、事柄の重さは、背後に退けられる。こういう文章を読まされるとき、女の「執心悪業」を難ずるよりも、古歌や雅文の、古い伝統的表現が包み込んできた、感情の世界にまず搦めとられ、否応なく納得させられてしまうのを、どうすることもできない。女はたいへんな事実を告白しているのだ。だが読者は、事の重大さを、意識することも、難ずることもできない。表現の魔力により、屈服させられてしまうのである。文章は、古歌や懸詞を縦横に駆使した、七五調であるが、それ以上の技巧があるわけではない。ただこの七五調のリズムが問題で、これはどんな感情にも、共鳴者を呼ぶ役割を果しているといえる。しかし『とのゐ草』全体が、この種の技巧的文章で、埋められているわけでもない。むしろかなり抑制されているものが、あるところに来て、突如噴出するかのような様相を呈するのが、この種の技巧的表現であるといえる。

津の国の「仁光坊」の火というのは、当時かなり知れわたっていた話らしく、『百物語評判』にもあるが、『とのゐ草』の「仁光坊といふ火の事」(巻五―第三)も同話で、これは家につく怨霊の話である。津の国の裕福な代官格の家の祈禱法師に、仁光坊という美僧がおり、代官の奥方が彼に思いを寄せる。仁光坊は、相手にもしなかったが、拒絶された奥方がさか怨みをして、夫の代官に讒言をする。代官は怒り、仁光坊を斬るのであるが、その時仁光坊は無実を訴え、八代まで祟るであろうとの呪いの言葉を残して死ぬのである、死後陰火が飛び、やがてその代官の家は災に見舞われ、亡びるという話である。

『百物語評判』では、「評判」と題するだけのことはあり、各種の「陰火」に筆者の論評がつけ加えられ、「かやうの事つねに十人なみにある事には侍らねども、たまにはある道理にして、もろこしの書にも、おりおり見え侍る」などと、筆者の見識の広さを誇示するのを忘れない。しかし怪を語るのに、興趣を見出す、楽しみの境地がないから、文章は味けない記述に終始しがちなのである。

同じ素材を扱いながら、『とのゐ草』の方が、はるかに長い物語になったのは、奥方が仁光坊に送ったという長い艶書が入るからである。

君ゆへに　思ひたつたの　たびごろも　きてしも花を　みわのやま
過ゆくままに　ならざかや　かすがのさとに　ひとりねて　おもひ
はいかが　ひろさはの　池のしみづに　身をはぢて――(以下略)

と、歌枕を並べた長歌形式の、すこぶる長い韻文で、末尾に

声はせで身をのみこがすほたるこそいふにも増る思ひなりけれ

の一首がつく。なくもがなの個所かもしれない。内容的にも陳腐で、誉められたものでもないからだ。ただ筆者はかなり本気になってこれを書き、書きながら楽しんでいる気配がある。こういう遊びの文章は、他の個所にも少くない。

「百物がなりして蜘の足を切る事」（巻四—第三）[4]の、「くもづくし」文、「年へしねこはばくる事」（巻二—第二）[5]の、「ねこづくし」、鬼ぐもの名におひて、上らうくものこび過たるも、げに穴くものふかきたくみやあらん。つちくものつちけに見こなせど、また青ぐもの草にまじりては、大象をもころす、おそろしき毒ともなれり。（以下略）

我家に猫あり、ねずみをもとらげ猫のとりもせで、かまどの前にわだかまつてぶせうから、へつゐのなかの灰毛によばれ、よしさらぶせうものよとあなどれば、手白手白と飛まはり、肴を三毛のぬすみくらひ、をのが毛のぶちにうたれても、まだらまだらとまな板にむかひ（以下略）

これら遊びの文章は、怪談そのものとは何の関係もない。関係はないが、読んでいて別に邪魔になるものでもない。邪魔にならないばかりか、猫の怪のあとの「猫づくし」、蜘蛛の怪のあとの「蜘蛛づくし」は、怪を語る気分に充分に合致し、融けこんでいる。もっともこの二個所の戯文は、似船の加筆かもしれないという疑問も、成り立つが、そうだとしても、前半の怪異談と、後半の「ものづくし」の文章は、気分的に充分統合されている。

『とのゐ草』の随所に散りばめられた、これらさまざまの、技巧を凝らした文章に出遇うとき感じるのは、筆者安静にとって怪談は、ただの知識や、広い見聞のあかし、珍しい話柄への興味というばかりでなく、常に表現されるべきものとして、意識されていたということ、自由な表現への意欲をそそる対象として、彼の眼に映じていたということである。この事は、やはり重要な事ではないだろうか。闇夜に迫る来る妖怪変化を、追い払う目的で、夜伽に怪談が語られたという説もあるが[6]、一方では、「怪を語れば、怪いたる」（『伽婢子』巻之十三）とか、「されば此百物語は、是魔を修する行にして、怪異を祈る法なり」（『新百物語』巻四—五）など、まるで反対の事を言っている場合もある。ただどちらも、怪談に呪術力を期待し、何らかの実効を求めているのは同じ事で、これがこうじたところに顔を出すのが、教訓性を強調する、怪談有用論である。

たとえば『太平百物語』。享保十七年の出版であるから、安静・似船師弟の時代より、いく分新しくはあるが、「百物語をして立身せし事」（五十）という、典型的怪談有用論がある。ここに強調されるのは、怪談の人生に有益であること、百物語の才に長けた、さる大名の御台所に勤める料理方が、若君に百物語を申し上げた功により、若君が成長して国主になって後呼び出され、新知三百石、大小姓格にとり立てられた話がのっている。全巻のうち止めに、百物語礼讃の一話をもってしたのであろうが、この種の怪談有益論は、みな、教訓性を強調するところに始まっている。それは安静とても例外ではないかもしれないが、それでいながら怪談を、自分の表現の世界にたぐり寄せることができたのは、彼が、怪談とは所詮人間の懊悩や欲望、迷いなどの上に重ね合わされた、異常心理や錯覚でしかない事を感じていたからだと思う。

「天狗つぶて附こころにかからぬ怪異はわざはひなき弁の事」（巻一—第八）に、

されば心にかからぬ怪異は更にその難なきものをや。なふお目のまけを取給へ空に花はさき候まじ。なるこをばをのが羽かぜにうごかして心とさはぐむらすずめかなと。忌の文字もをのがこころとはかけり。梅をおもへば口に酢たまり。しらみときけばはだかゆくなる。心生ずれば種々の法生ずいはれぬきつかひに。色々をあんじまちまちのわざはひをまふく。あくたの中に蚓をほり出すがごとし。むさともごと機（気）にかけまじき事也。惣て小事は身のたしな

み心のおさめやうにもよるべし。身ほろび家たゆるなどは因果なり。あへていらふべからず。

と、怪異の災は心因に依るから、無闇に気にするのはよくないという安静。これは筆者の体験がからむ一話で、天狗つぶてを打たれた家は、必ず焼亡の難に遇うという俗信をしりぞけたさる人の家は、筆者が四十年後に通った時も、そのまま無事であったという話である。日常性の中で、無闇に俗信の虜になる愚を述べているわけだ。人間が好むと好まざるとにかかわらず、怪異の世界に関わりを持ってしまう、その一つの原因が心因にあるとの指摘が、当を得ているのは確かだが、この種の見識が、当時の知識人のなかに、特別のものであったとも思われない。ただ

なふお目のまけ（膜）を取給へ。空に花はさき候まじ。なるこをばをのが羽かぜにうごかして心とさはぐむらすずめかな

と、和歌を交えての快くなめらかな表現が、教訓性をつつみこみ、人間の迷いや欲望に、冷徹な言辞で、批判的に迫るということをしない。表現のなかに全てを包みこみ、距離をおいて対象を眺め、その余裕のなかには、人間のあらゆる側面を、温く肯定してしまう感情をすら潜ませているのである。

これら安静の見識には、もちろん化け物や幽霊の存在そのものに、冷静に疑いの眼を向けるほどの、合理性はない。これらは人間の空想力が生み出した、いわば文化における共有財産のようなもの、その存在を承認すればこそ、『とのゐ草』の収集もなされたのであろうが、多くの怪異談のなかに含まれる、人間の本性や迷いや欲望それ自体が、彼にとっては、不可解な謎であると同時に、人間本来の姿として彼の内部に共感を呼び起すものがあったのではなかろうか。「是をおもふに人はばけもの世にない物はなし」とか、「一条通り夜更けて戻り橋……化物が通るとは誠に是ぞかし」とは、西鶴の言葉であるが、安静も、

かの恋路のせきのゆふぎりに、梅が小路の露をわけてふくまがへがささに息こめて、ひたに人めを忍ぶ袖も、こはさの外のばけものならし（巻一―第一）

と、「ばけまじきもののばけたるこそ、はなしの中のはなしならめ」。つまり恐さを度外視して、恋路に迷う男女の大胆な姿も、「ばけまじきもの」が化けた、人間の姿だというわけだ。

従って産女、見こし入道、山姫、仁光坊、耳なし団都（いも）の話など、巷に流布するおなじみの怪談にまじり、本来怪談とはいえない類のものまでを収集している。その一つが「錯覚」をテーマにしたもの、また恐い物知らずの男女が、闇夜に演ずる、さまざまな行為。その他凡人には思いもつかない深遠な智恵才覚を用意している人間、これらすべてが安静にとっては、化け物に見えたということは、表現するに価する、不可思議、微妙なものであったということだろう。

巻二の九話から十一話は、「月影を犬と見る事」「疽（いも）する子をばけ物と思ひし事」「いざりを班（ばけもの）と見し事」と、闇夜の錯覚をテーマにした一連の話が並び、つづいて「山臥（ぞし）しのびものをおどす事」「博奕（ばくち）うち女房におそれし事」など、これまた闇夜の中に展開する、怪談ならぬ人間喜劇をえがいてみせる。他にも怪談ならぬ怪談は多いのであるが、皆人間の弱点をたくみについていると同時に、弱点を自覚する人間の行為が、ある場合は周到果敢で、水際立っていたり、ある場合は途方もなく滑稽であったり、その描きわけが自由自在、なみなみならぬ、人間への関心の深さを、垣間見ることができるのである。これら怪談ならぬ怪談が語られるときにも、表現には、怪談的手法、つまり闇夜の中に作動する感覚や心理を、手がたく、しかも手順よく描写し、読者を作中の世界に引っぱり込んでおいて、途中でうっちゃり、意外な結末に興がらせ、また感じ入らせるというような、心憎い描写法を心得ているところがある。

たとえば、「山臥（ぞし）しのびものをおとす事」（巻二―十二）[7]という一話。「しのびもの」とは密会の男女のことで、その場所は、ある「里とをき所」の「あれて物さびた」一宇の堂。主人公は「鬼一口のやみ夜にあやなくまよひゆく」山伏で、これたけで、怪談としての舞台は、充分に用意されているわけだ。

かかる所へ夜もふけなんに火ひとつみえたり。此火さしにさして来る。こはすかぬ事やと（山伏は）柱をつたひ、てんじゃうへあがるに、みめよき女ぼう行灯（あんどう）さげて来る。いよいよおそろしく思ひしに……

と、山中の深い闇をつたわり、荒れた御堂の中へ、突如姿を現わした妖艶な美女――。怪談の語り口が、またその場面が、充分に駆使されながら、意外にも次に展開するのは、まことに滑稽な場面なのだ。次には風采堂々たる武士が登場し、下の床では若い男女の蜒蜒たる情事、それを天井裏から見下す山伏。山伏も「われ、をどさでゆるすべし」と、少しはもののあわれを解するところを見せていたが、「いつしかうとみ果て、げにぬかれたるここち」して、一刻も早く脱出したく、二人の枕もとに、わざと荷物を落すのである。驚いたのは逢引の男女で、裸体で逃げ出す。山伏は「鬼ときけや」とばかり、天井を踏み鳴らし、男女が置いて行った道具類を頂戴し、立ち去ったというのである。怪談というより艶笑小咄である。

前述の「三人しなじな勇ある事」（巻四―第五）[8]のあとにつづく、「をんなは天性きもふとき事」（巻四―第六）[9]、「似たるは似てさらに是ならざる事」（巻四―第七）[10]も、やはり闇夜にくり広げられる、人間臭あふれるドラマである。

前者は〈死人、女の裾をくはへて離さざる事〉というような、怪異談にもなるべき素材であるのにそうはならない。女は闇夜の中で、自分の裾をくわえた死体に疑問を起し、その原理をつきとめるべく、再度引き返し実験を試みる。そして力の掛けかたに依っては、死体が口を開き、物をくわえる事もあり得ることを確かめ、それを手がら顔に恋人に報告するのである。驚いたのは男で、その後は女に逢うのを止めてしまった。筆者は、女は天性大胆にできているが、そこを隠すのが、女らしくて好い事だなどと、教訓をたれている。これは怪異にもの怖じしないということが、必ずしも人間の美徳にはうつらなかった、筆者安静の感受性の質からきていると同時に、むしろ恐怖心を捨て去り、大胆に振舞う人間を、「こはさの外のばけものならし」というように、常識外の、一種異様な存在として、意識することによっていると思う。

「いざりを班（ばけもの）とみし事」（巻二第十一）[11]とあるように、安静には、「班」即ち「ばけものであった。つまり、〈別れる〉〈離れる〉など、「班」は、周囲からはっきり目立って、異質であることを表現する文字で、「班」が「ばけもの」であるのは、茫漠たる暗闇の中に、明確に知覚される。異質異様の何物かであるからだ。恐怖心を持たない人間も、その感受性のありように於いては、また異常異質であり、そのような人間の行為は、「こはさの外のばけもの」として、これまた怪談の素材となり得るに充分だったわけである。

このように『とのゐ草』では、奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の作品の世界を持つことができた例として、仮名草子のなかでも、きわめて、レベルの高い作品になっているということがいえるようである。

註
(1) 野間光辰氏、古典文庫本解説
(2) 原文『とのゐ草』では、巻二になる。これは原本『とのゐ草』の二巻と四巻が、改題本『御伽物語』では、入れかわっているからである。従って巻四というのは、古典文庫本『御伽物語』の巻立てによる。
(3) 「近世怪異小説の一源流」（潁原退蔵『国語国文』第八巻第四号）
(4) 原本『とのゐ草』では巻二
(5) 原本『とのゐ草』では巻四
(6) 折口信夫『お伽及び咄』（全集第十巻）
(7) 原本『とのゐ草』では巻四
(8) 原本『とのゐ草』では巻二
(9) 〃
(10) 〃
(11) 原本『とのゐ草』では巻四